

# 英語と日本語をめぐる認識と借用語

金谷良夫

西洋語としての英語と非西洋語としての日本語とは、言うまでもなくかなり異なっているにもかかわらずそれぞれ美しく、すばらしい言語である。それは、話し言葉としても文章言葉として見てもしっかりである。だが、言葉は変化するものである。今、日本語のなかに外国からの借用語が夥しく入ってきている。所謂、外来語である。これは世界のグローバル化にともなった時代の要請からなのか、また避けがたい社会現象として見られる所以なのか、日本語のなかにさまざまな国々の言葉——ことに国際語もしくは「普遍語」と言ってよい英語からの借用語が日々絶えることなく使用されているのが2010年の状況である。同時に、以前にも増して、日本語のローマ字表記の表現同様、英語を片仮名表記する表現が著増している。反面、日本人は依然として日本は特別な国だと考えている人が少なくないことも否めない。本誌の第13号の拙稿「英語、英語習得、そして和製英語に見る一視点」において、日本語のなかで英語や和製英語の使い方について注意すべき点を指摘したが、本稿においては、英語と日本語についてどう認識すべきか、また一つの提言として日本語の美しさを保つために、英語の誤った発音や語法に基づいた数多の借用語を改めるべきであるということ述べたい。

まず、日本においては英語も日本語も重要な言語であり、日本人は日本語と英語とをきちんと学ぶ必要があるということを取って強調したい。日本人は相即不離の関係にあり、アイデンティティの形成の役割を果たす日本語習得は不可欠であり、その上また英語は今唯一無二の世界語と言ってよいからである。作家水村美苗は、その著書『日本語が減びるとき——英語の世紀の中で』（筑摩書房、2008年）において「インターネットという技術の登場によって、英語はその〈普遍語〉としての地位をより不動にただけでなく、これからもずっと英語の世紀のなかに生き続ける。英語の世紀は、来世紀も、来々世紀も続く。英語と英語以外の言葉を隔てる言葉の二重構造は、今世紀だけでなく、来世紀も、来々世紀も、その先も、多分ずっと続くのである」と述べ、英語の必要性を強調している。また、水村は、『日本経済新聞』（2009年10月15日付）において、「日

本語の読み書きがしっかりできない人の読み書きする英語はだめ」だと述べる。さらに、「世界史における日本語の使命」（『ユリイカ』第41巻第2号、青土社、2009年）において、日本における英語と日本語との重要性を述べている。つまり、「日本語バンザイ」ではなく、日本人全てが英語ができる必要はないし、「英語の世紀に入った」とはいえ、日本人はまず日本語ができるべきだという認識が必要で、それを踏まえたうえで、少数ではあっても十分な数の優れた〈二重言語者〉を育てなければならない。この二つは、どちらも急務であり、しかも表裏一体の関係にあるというのである。これはまさに一面では的を射ていると言わざるを得ない。

だが、他面から見れば、優れた英語の習得者（「二重言語者」）が必要なだけでなく、政治家、企業のトップ、知識人、芸術家、音楽家、俳優、あるいはスポーツ選手なども普通の英語力——ことに会話力は習得する必要があるだろう。また、大学で英語を選択する者も英語力をつける必要があるのは、草の根の英語力も無視できないからである。二重言語者とはここでは日本語と英語とを駆使できる者を言う。そして、二重言語者にならなくとも、グローバル化が深化するなかで生きざるを得ない日本人は、他の言語を有する国々の人々とのコミュニケーションをとる場合、英語という媒体を避けて通ることはできない。加えて、日本はもはや孤立した特別な国としては存在し得ない。それは、端的な例を示せば、言うまでもなく食料自給率の極端な低さであり、天然資源の乏しさ所以である。

日本人は現在、世界のなかでコミュニケーションの手段として英語を使うことを余儀なくされているにもかかわらず、そうしたコミュニケーション能力をもっているとは言い難い。英語に纏わる英語教育について、猪口孝（新潟県立大学学長）は、『日本経済新聞』（2010年2月22日付）において、日本人の多くはいまだに「徳川モデル」で生きてしていると指摘する。「英語教育の鎖国」をする日本は「5年以内に脱却を」すべきだと提案している。猪口は、その論点のなかで、国の内外を問わず、通訳や翻訳に頼り切った多国間交渉の場裏における日本人が世界のリーダー的存在になれないのは日本がそうした「通訳任せの組織上層部」という構図になっているからであり、そうなれば結局世界から日本人は「締め出し」を招いてしまうと警鐘を鳴らしている。すなわち、「経済や金融や技術の展開は、地球規模でなされている度合いが当然になっているのに、その地球的展開の

媒体である英語を、こんなにまでいい加減に扱っている日本人に罰が当たらないか。必ずしっぺ返しが来るのではないかと、日本の前途を憂慮していると言ってよい。現に、経済や金融を例に取れば、このところのアメリカのプライムローン問題に端を発し、リーマン・ブラザーズ社破綻、ドバイショック、ギリシャの財政不安、スペインの経済力の弱体化というような問題は一瞬のうちに世界経済に影響を与えてしまっているのだ。日本人特殊論について言えば、エドウィン・ライシャワーが四半世紀も前に指摘した日米関係の不均衡に関して言及した米日財団理事長のジョージ・パッカーは、「日本人特殊論はやめよ」（『朝日新聞』2010年2月17日付）と提言している。加えて、その問題の要因は、一貫した外交政策の目標がない政治や有能な政治リーダーが日本にいないという政治家としての資質だけでなく、日本人は「日本語の壁の中で暮らしているから、他国民は日本人の考えを聞くことができなく、「国際舞台で堂々と英語による議論ができるリーダーが各界にぞろぞろいる国にならないと日本は危うい」し、また「米国の公用語だから押しつけているのではなく、世界言語たる英語を駆使してほしいからだ」と述べている。ライシャワーは、1988年にすでに『今日の日本人——変化と継続性』（ハーバード大学ベルクナップ出版局）において、「日本は表面上では驚くほど国際的な国であるが、その世界的な輝きも水面下では孤立した内向的な国だ」と述べている。こうした問題は国が無策だったから解決していないのか。かように、ここで取り上げたその英語と特殊性は、まさに古くて新しい問題そのものなのである。だからこそ、敢えて再びここで強調しておきたいのだ。日本人は、そうした問題を真剣に受け止め克服することを強く認識する必要に迫られているのである。

次に、もう一つのトピックは、日本語における英語からの借用語の使い方に関して考えることだ。先に触れたようにもはやグローバル化が深化している以上、日本人は日本語のなかに借用語が入ってくるのを食い止めることはできないのは自明の理である。たとえば、「インターネット」や「コミュニケーション」という単語は他の言葉に置き換えられないだろう。逆に言えば、たとえばマンガ、アニメ、フトン、トーフなどは完全な英語の語彙として市民権を得ていることも事実である。したがって、今、元来日本になかった語彙を外国から取り入れざるを得ないため、ここでは借用語を使うべきではないということを述べているのではな

く、使うからにはそうした表現を適切に使うべきだと提言しているのである。

これに関する問題点は、大別して三つある。こうした三つの点は、厳密に言えば、美しい日本語を損なうことになるのではないか。さて、第一は、発音による問題、第二は語法による問題、そして第三は英語の発想から歪められた問題である。日本人にとって、英語の発音は日本語のそれとは極端に異なるため、通じる発音をすることは容易ではない。発音は英語のネイティブスピーカーと同じでなくてもよいが、言いたいことが完璧に相手に通じなくてはならない。その意味では、早いうちから通じる発音の練習をしたほうがよいのは当然である。だが、現状では依然として日本人の多くの発音は良いとは言えないだろう。その影響からなのか、英語の発音が誤って発音された単語やフレーズがそのまま借用語として日本語のなかで跋扈していると言うことができる。ただし、理っておきたいのは日本語で表現する借用語の発音はむしろ英語流の発音にする必要はないことである。日本でたとえば文章を読むとき借用語のみを元の言語の発音で表現するのは違和感があるからだ。話を元に戻せば、一旦誤ったそうした表現が定着してしまうと、人はそれが誤っていようと何の躊躇もなく当然のことと見做して使うものだ。それは一種の思い込みと言ってよい。思い込みによって人は真理を見失ってしまう。思い込みの強い人ほどそれを捨てられないのだ。だからこそ、今、そうして間違っ使用されている表現を改めるべきなのである。

ここで誤った発音（時には故意に発音を変えたのかは不明）を基にした英語からの借用語である第一の問題の適例は、生涯、経歴、職業を意味する「キャリア」、および許容を意味する「キャパシティ」である。元の英語の発音を実際の音通りにここで書くのは難しいが、それぞれ「カリア」、「カパシティ」である。別な例を引けば、テレビの「ニュース」、料理用の「オープン」、滑らかなという意味の「スムーズ」、野球の「チーム」や「メジャー」リーグ、旅行の「ツアー」を、正しく順を追って言えば「ニューズ」、「アブン」、「スムーズ」、「ティーム」、「メイジャー」、「トゥアー」となる。「メジャー」は巻尺としても使っているが、これは英語の元の発音に極めて近い。撮影室の「スタジオ」、フットボールの「スタジアム」はそれぞれ「ステューディオウ」、「ステューディウム」のほうがよい。選考の結果が与えられる賞は「アワード」ではなく「アウォード」であり、「アワード」と聞くと強い違和感を覚える。専門家の「エキスパート」は「エクスパート」のほうが

よい。シャツに「アイロン」をかけるのと、ゴルフの「アイアン」は元々同じ綴りで同じ発音である。最も奇異な例は、アメリカのノーベル賞受賞作家トニー・モリソンの作品 *Beloved* (『ピラビッド』) を『ピラブド』と一時訳していた(後に直した)が、これは明らかに「思い込み」による誤った発音に由来する。『ブリタニカ国際大百科事典』(2007年)の電子版ではいまだに『ピラブド』となっている。もちろんその発音は間違いとは言えないかもしれないが、普通、そう発音しない。『例文で読むカタカナ語の辞典』(小学館、1998年)に、ボタン、スナップなどで取り外しのできる襟の意味の「アタッチド・カラー」という単語が出ているが、正しい発音は「アタッチト・カラー」である。これも間違った発音に由来する。確かに細かい表記では紛らわしいという問題が発生するかもしれないが、正確な発音に近いほうがよいのである。因みに言えば、実際、日本人は英語以外の言葉を発音するさいその国の発音を尊重する傾向にあるのではないか。本稿では人名・地名等の固有名詞は中心に扱っていないけれど、フランスの「パリ」を「パリ」、イタリアの「フィレンツェ」を「フィレンツェ」というようにしてきたはずである。ただ、最近ではかつて「アンチーク」だったのをより正しい「アンティーク」というように発音し、書くという動きはあるにはある。第二の問題は、文法の誤りからくる表現だ。誤った語法として、単数・複数を顧みないことである。具体例をみると、テニスやバドミントンなどの試合を「シングルス」と言うが、一方ではフィギア・スケートのそれを「シングルス」と言わず、「シングル」(英語ではsingles「シングルズ」)と言っている矛盾がある。また、場所の名称は「〜ヒルズ」と複数で言う場合が多いけれど、オリンピックの試合を「オリンピックス」とは言っていないという、有機的でない齟齬が発見できる。首尾一貫した表現を使うべきだろう。他の問題として、動詞「エンジョイ」を名詞のように「エンジョイする」と表現する。この類の例は、他に、「アナウンスする」、「インストールする」、「エキサイトする」、「得る」の意味の「ゲットする」、「保つ」の意味の「キープする」(確かに古くは名詞もあったが、発想は動詞だ)、あるいは「グリップアップする」というように理にかなっていない使い方をしている。throughは前置詞・副詞・形容詞だが「スルーする」というように使う場合がある。これでよいのだろうか。最後に、第三番目は表現自体が奇異なものである。具体例を見てみよう。パネルディスカッションの「パネリスト」を、英語では存在しない「パ

ネラー」と表現する問題が適例である。土壇場でキャンセルすることを俗語で「ドタキャン」と表現するが、これは日本語と英語とを組み合わせた短縮和製英語だ。まさに拙稿「英語、英語習得、そして和製英語に見る一視点」で述べた和製英語の例だ。「テレビ」は「テレビジョン」の略であり、日本人が長い言葉を省略する傾向にあることの具現化だ。現在頻繁に使われるエコロジーの「エコ」、ナビゲーターの「ナビ」もその類だ。他の例として、ドイツ語と英語とを組み合わせで作られた「フリーター」の語源の例を見れば明らかだが、そうなるともう非常に奇怪と言うより、むしろ愉快と言える。上記の三つの問題点を含む具体例は枚挙に遑がない。固有名詞についてはなおさらだ。今こそ、正しい使い方をする方向へ転換しないと、人が忘れ物をしてそれを家に取りに戻ることが遅くなればなるほど、それを取りに戻するのにそれだけますます時間がかかるように、正しい使い方の原点に戻ることにもそれだけ時間がかかることになるのである。過つは人の常であるがゆえに、過ちては則ち改むるに憚ること勿れである。

美しい英語も日本語もそれぞれ時代の流れとともに変化しているが、必ずしも正しい方向へ向っているとは限らない面がある。われわれは時代によって、国際語としての英語習得の必要性や日本語における言葉の変化の要請があれば、それに従わざるを得なくなるという認識をもたねばならないだろう。さらに、日本語とはかなり異なる英語を習得するためには、われわれ自身の考え方や発想を変えなければならないだろう。そして、日本語をきちんと学ぶという認識をもたなければならない。換言すれば、グローバル化の流れに逆らうことは難しいし、多くが、借用語として新しい表現を使っていればその誘惑に打ち勝つことも難しいかもしれないが、その変化が誤った方向に変化しているとすれば、方向を修正し、整合性のある表現にすべきなのである。